

令和7年度版 中学校『国語』

# 「移行資料」付属 補充教材

## (1) 1年教育出版→2年光村図書の場合

- ・言葉3 さまざまな表現技法 ..... 2
- ・漢字3 漢字の成り立ち ..... 6
- ・思考のレッスン1 意見と根拠 ..... 8

## (2) 1・2年教育出版→3年光村図書の場合

- ・文法3 付属語 ..... 10
- ・漢詩の風景 ..... 16

光村図書

同じ情景を表す表現でも、他のものにたとえたり、くり返したり、言葉の順序を入れかえたりすることによって、より印象的に伝えることができる。

AとBを比較し、Bのように表現する効果を考えよう。

A ダンサーが軽やかに踊っている。

B ダンサーがまるでちょうのように、軽やかに踊っている。



比喩（たとえ）

71ページ 比喩で広がる言葉の世界

物事を、他のものにたとえて表現することを**比喩**という。比喩には、主に三つの方法がある。それぞれの比喩によって、どのような印象が生み出されているかを考えよう。

直喩

「まるで……」「あたかも……」「……ようだ」「……みたいだ」などの言葉を使ってたとえる方法。これらの言葉によって、たとえられるものととえるものが結び付けられ、情景や心情などがわかりやすく、生き生きと伝わる。

例

それからにわかによだかは口を大きく開いて、羽をまっすぐに張って、まるで矢のように空を横切りました。  
宮沢賢治「よだかの星」の一部  
あつという間もなく風を切って、こまのようにくるくる回りながら、みるみるうちに闇の底へ、真逆さまに落ちてしまいました。  
芥川龍之介「蜘蛛の糸」の一部

隠喩

「まるで……」「……ようだ」などの言葉を使わずにたとえる方法。比喩であることを明示しないため、直喩に比べて強い印象を与える。

例

蜂の羽音が  
チューリップの花に消える  
微風の中にひっそりと  
客を迎へた赤い部屋  
＝  
「蜂」＝  
「チューリップの花」

三好達治「チューリップ」

擬人法

人間でないものを人間にたとえて表す方法。自然現象や物体、動植物などを、人間の行動や気持ちになぞらえて表すため、生き生きとした印象を与える。

例

夕日がせなかをおしてくる  
まっかなうででおしてくる  
歩くぼくのうしろから  
でっかい声でよびかける

阪田寛夫「夕日がせなかをおしてくる」の一部

反復

同じ言葉をくり返す方法。くり返しによって、リズムが生まれたり、強調されたりする。

例

あいたくて  
あいたくて  
あいたくて  
きょうも  
わたげを  
とばします

工藤直子「ねがいごと たんぽぽはるか」

倒置

普通の言い方と、言葉の順序を入れかえる方法。歯切れのよいリズムが生まれ、情景や心情が強調される。

例

わたしはふしぎでたまらない、  
黒い雲からふる雨が、  
銀にひかっていることが。

金子みすゞ「ふしぎ」の一部

体言止め

※体言については、くわしくは254ページで学習する。

文末や句末を体言（名詞）で結ぶ方法。しみじみとした余韻を残したり、きっぱりとした印象を与えたりする。

例 古池や蛙飛（かうとび）こお水のおと（みづのみづ） 体言（名詞） 松尾芭蕉（まつお ばしゅう）

省略

文章や言葉を途中で止めて、後を省略する方法。表したい情景や心情を言い切らず、読み手に自由に想像させることによって、作品の世界がより豊かなものになる。

例 菜の花や月は東に日は西に 与謝蕪村（よさ ぶそん）

対句

言葉を形や意味が対応するように並べる方法。リズムや意味の面でまとまりが生まれ、整然とした印象を与える。

例 だれも 見てゐないのに 咲いてゐる 花と花 だれも きいてゐないのに 啼いてゐる 鳥と鳥 立原道造（たちばら みちぞう）「ひとり林に……」の一部

生活に生かす

比喩を効果的に使う

比喩は、日常生活の中でもよく使われる。物の形や大きさなど、イメージしにくいものを説明するときには、よく知られたものにたとえるとわかりやすい。

・イタリア半島は、長靴のような形をしている。

また、動作や様子、気持ちなども比喩を用いることで伝わりやすくなることもある。

・布団から亀のように顔を出す。

・湖は、まるで鏡のように静まりかえっていた。

比喩を効果的に使って、おどろきや感動を的確に、印象深く伝えよう。

新出漢字

68 踊（ヨウ） おどる

68 喩（ユ）

68 闇（ヤミ） やみ

69 隠（イン） かくす

69 与（ヨ） あたえる

69 蜂（ホウ） はち

69 迎（ゲイ） むかえる

69 擬（ギ）

69 倒（トウ） たおれる

70 韻（イン）

70 途（ト）

70 靴（カ） くつ

70 亀（キ） かめ

新出音訓

68 軽やか（かるやか）

70 対句（ツイク）

漢字の練習 

漢字3

漢字の成り立ち

「山」という漢字は、山の形をかたどって作られた。漢字の成り立ちには、このように物の形をかたどって作る方法の他にも、幾つかのものがある。



中国から受け入れた漢字の他に、日本で独自に作られた漢字もある。そのような漢字を、**国字**とよぶ。国字は、会意の方法を用いて作られたものが多い。

例 火 + 田 ↓ 畑  
山 + 上 + 下 ↓ 峠

漢字の分類「六書」

**象形・指事・会意・形声**は、漢字の「作り方」についての説明である。この他、漢字の「使い方」についての説明として、**転注**と**仮借**がある。この六種は、まとめて「六書」とよばれ、古来、漢字を分類する基準とされてきたものである。転注には諸説あるが、代表的な説は、ある漢字の意味が広がって他の意味にも転用されることである。例えば、「楽」は、元は「音楽」の意味だが、音楽を楽しむことから、「たのしい」の意味にも使われる。

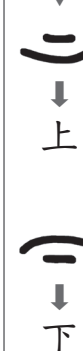
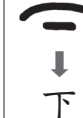
仮借は、その意味を表す漢字がないときに、同音の漢字を借りて表記する方法である。例えば、中国語で「くる」を意味する「ライ」にはもともと、それを表す漢字がなく、同音の「来」（元は、麦を表す）を借りて表記されるようになった。

15

10

5

漢字の成り立ちには、**象形・指事・会意・形声**とよばれるものがある。

| 象形                                                                                                           | 指事                                                                                                                                                                                                           | 会意                                                   | 形声                                                                                                                                                             |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 物の形をかたどって、その物を表す。<br>▼  | 抽象的な事柄を、記号やその組み合わせで表す。<br>▼ <br>▼  | 二つ以上の字を組み合わせ、新しい意味を表す。<br>▼ 木 + 木 ↓ 林<br>▼ 口 + 鳥 ↓ 鳴 | 二字を組み合わせ、一方で音、他方で意味を表す。音を表す部分を <b>音符</b> 、意味を表す部分を <b>意符</b> とよぶ。音符は音だけでなく、意味を表す場合もある。<br>▼ 金 [意符] 金属の意 + 同 [音符] ドウ ↓ 銅<br>▼ 氵 [意符] 水の意 + 青 [音符] セイ (澄むの意) ↓ 清 |

10

5

練習問題

・は中学校で学習する音訓

321 ページ

1 次の漢字の成り立ちを調べ、象形・指事・会意・形声に分類してみよう。

- ① 月      ② 狩      ③ 本  
④ 河      ⑤ 木      ⑥ 利

2 次の文字を組み合わせ、漢字を四字作ろう。  
(各文字は一回ずつ用い、必要ならば、位置に応じて形を変えること。)

山 子 月 言 系 石 日 人

3 次の漢字に共通する音を答えよう。

- ① 飯・板・販      ② 干・肝・汗  
③ 輸・愉・諭      ④ 河・何・苛  
⑤ 伯・拍・泊

新出漢字

|             |             |              |
|-------------|-------------|--------------|
| 233 伯<br>ハク | 233 肝<br>カン | 232 符<br>フ   |
| 233 拍<br>ハク | 233 汗<br>カン |              |
| 233 泊<br>ハク | 233 諭<br>ユ  | 233 峠<br>トウゲ |
|             | 233 苛<br>カ  | 233 狩<br>カシユ |
|             |             | 233 販<br>ハン  |



## 思考のレッスン1 意見と根拠

思考のレッスン2  
原因と結果  
186 ページ

情報整理のレッスン  
比較・分類  
52 ページ

### ■ 根拠とは

意見の正しさや有効性を証明するものを、**根拠**という。意見を述べるときには、根拠を明確に示す必要がある。

「根拠」というのは、「証拠」のようなものですか。

そのとおり。意見の正しさを裏づける「証拠」が「根拠」だ。だから、根拠のない意見や、根拠が不確かな意見は、信用しないほうがいい。



根拠は、意見の信頼性を高めるためにある。だから、人によって異なる考えではなく、誰が見ても変わらない**事実**を示すことが大切だ。

### ① 根拠がないと……

**意見** 探偵は、犬より猫を飼うべきだ。

これだけでは、聞く価値のある意見か判断できない。

### ② 「考え」を根拠にすると……

**意見** 探偵は、犬より猫を飼うべきだ。

**根拠** 猫のほうが、かわいい。

「犬のほうが、かわいい」と思っている人は説得できない。

### ③ 「事実」を根拠にすると……

**意見** 探偵は、犬より猫を飼うべきだ。

**根拠** 猫は、散歩をさせなくてもよい。

確かにそうだ。でも、なぜそれが、猫を飼う理由に？



### ■ 意見と根拠の結び付き

根拠を示すときは、その根拠が意見とどのように結び付くのかを説明する必要がある。これを**理由づけ**という。無理のない理由づけは、意見の説得力を高める。

**根拠** 猫は、散歩をさせなくてもよい。

**理由づけ** 仕事で家を空けることが多い探偵は、毎日散歩をさせるのが難しいから。

**意見** 探偵は、犬より猫を飼うべきだ。

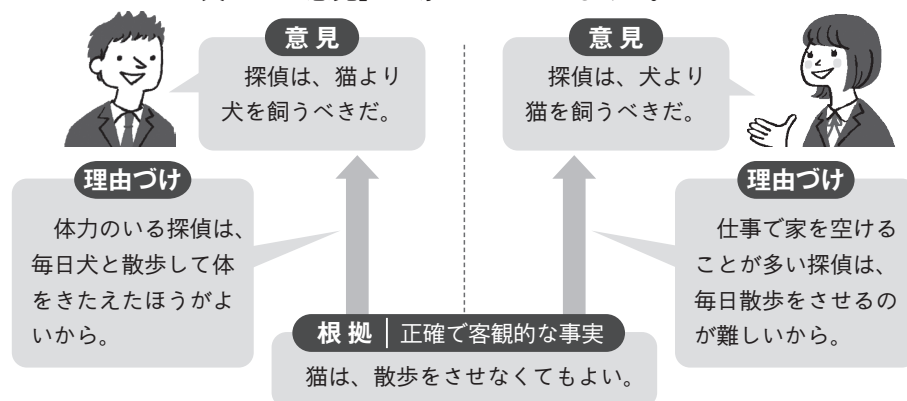
あなたの意見に納得した。猫を飼うことを検討しよう。



### チェックポイント

- ✓ 意見を聞いたり、伝えたりするときには、次の点を確認しよう。
- ✓ 根拠が示されているか。
- ✓ 正確で客観的な事実を根拠にしているか。
- ✓ 理由づけに無理はないか。

「理由づけ」によっては、同じ「根拠」から、異なる「意見」が導かれることもある。



問題1 ▼ 次の文章には、適切な根拠が示されているか。なぜそう考えたかも合わせて答えよう。

① 伝統文化は大切にすべきだ。なぜなら、とても大事なものであるからだ。

② 文化祭の学級展示について、クラスでアンケートを取ったところ、三十五名中、三十名が、「動画を作って発表した」と答えた。このクラスの展示は動画にするべきだ。

③ 敬語を使う必要はない。尊敬の気持ちは、敬語を使わなくても、自然に相手に伝わると思うからだ。

問題2 ▼ 次に示した意見と根拠を結び付ける理由づけを考えよう。

① 「意見」 私は、ごみ袋に名前を書くことに賛成だ。

「根拠」 この制度を取り入れたN市では、ごみが前の年より八パーセント減った。

② 「意見」 私たちは、もっと基礎体力を強化すべきだ。

「根拠」 先週の試合では、後半、疲労でプレーが乱れ、相手チームに逆転された。

### 新出漢字

138 頼  
たのむ  
たよる

138 偵  
テイ

139 礎  
いしずえ

漢字の練習



付属語

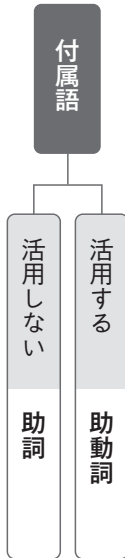
練習問題



1

付属語

- 付属語には、助動詞・助詞の二種類がある。
- 活用する付属語を助動詞、活用しない付属語を助詞という。



2

付属語の種類

1 助動詞

- 活用する付属語を助動詞という。
- 助動詞は、用言・体言や他の助動詞などの後に付いて、意味を付け加えたり、話し手・書き手の気持ちや判断を表したりする。

・朝焼けが、美しい。

↓ 助動詞を使っていない。「何が」どんなだ」という事柄を表す。

・朝焼けが、美しかった。

↓ 「過去」の意味を付け加えている。

・朝焼けが、美しかったそうだ。

↓ 「過去」「伝聞」の意味を付け加えている。

▼ 次の文を文節に区切り、助動詞に線を引こう。

- ① 今夜は、星が見えない。
- ② 校長先生は、正午に戻られる予定です。
- ③ 雨が強くなりそうだから、皆を早めに帰宅させよう。
- ④ 小学生の頃、決して約束は破るまいと心に決めた。
- ⑤ あの雲は、まるで魚のような形をしていますね。

- 一つの助動詞が、さまざまな意味を表す場合もある。
- 主な助動詞の働きには次のようなものがある。

| る・られる                                                        | せる・させる                       | たい・たがる                           | ない・ぬ(ん)                | う・よう                                      | た                                                                | ます             |
|--------------------------------------------------------------|------------------------------|----------------------------------|------------------------|-------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|----------------|
| 受け身<br>可能<br>尊敬<br>自発                                        | 使役                           | 希望                               | 否定(打ち消し)               | 推量<br>意志<br>勧誘                            | 過去<br>完了<br>存続<br>想起                                             | 丁寧             |
| 他からの動作を受ける。<br>それができるということを表す。<br>動作主への敬意を表す。<br>自然とその状態になる。 | 他に強制したり、他の行動を容認したりして、何かをさせる。 | 話し手・書き手が望むこと。<br>話し手・書き手以外が望むこと。 | 物事や動作を打ち消す。            | 想像・予想する。<br>何かをしようとする。<br>何かをいっしょにしようとする。 | 現在より以前のこと。<br>物事が終了し、動きが止まること。<br>ある状態が続いていること。<br>思い出し、思い当たること。 | 相手への丁寧な気持ちを表す。 |
| ・先生に呼ばれる。<br>・六時には起きられる。<br>・先生が家に来られる。<br>・面影がしのばれる。        | ・字を書かせる。<br>・野菜を食べさせる。       | ・水を飲みたい。<br>・犬が水を飲みたがる。          | ・最近、雨が降らない。<br>・言わぬが花。 | ・外は寒かろう。<br>・僕も帰ろう。<br>・さあ、始めよう。          | ・昨夜は寒かった。<br>・作品が完成した。<br>・高くそびえた山々。<br>・これは君のだったね。              | ・来週、決定します。     |

◆ 「れる」「られる」の見分け方

- 「れる」「られる」には、受け身・可能・尊敬・自発の意味がある。区別に迷うときは、次のような意味や使い方になっているか確かめよう。
- 受け身Ⅱ「○○に……をされる」
  - 可能Ⅱ「……ができる」
  - 尊敬Ⅱ助動詞を含む文節が、尊敬語の対象となる人物の行動を表す。
  - 自発Ⅱ「自然に……」を補える。

◆ 「ない」の品詞の見分け方

- 助動詞「ない」と補助形容詞「ない」の違いに注意しよう。迷った場合は、同じ否定の意味を表す助動詞「ぬ」に置き換えてみよう。
- このところ、雨が降らない。
  - 「ない」を「ぬ」に置き換えられる。
  - 「降らぬ」○ ↓ 助動詞
  - 外はまだ暗くない。
  - 「ない」を「ぬ」に置き換えられない。
  - 「暗くぬ」× ↓ 補助形容詞

| らしい          | 推定              | 根拠に基づいて推し量る。                           | ・雪が降ったらしい。                               |
|--------------|-----------------|----------------------------------------|------------------------------------------|
| ようだ・<br>ようです | 推定<br>比喩<br>例示  | 根拠に基づいて推し量る。<br>物事を何かにたとえる。<br>例として示す。 | ・風はやんだようだ。<br>・まるで絵画のようだ。<br>・君のような元気な人。 |
| そっだ・<br>そっです | 推定・<br>様態<br>伝聞 | 物事の様子や状態から推し量る。<br>他の人から聞いたこと。         | ・明日は晴れそうだ。<br>・明日は晴れるそっだ。                |
| まい           | 否定の意志<br>否定の推量  | 今後はそうしないという気持ち。<br>今後はそうならないという予想。     | ・悪口は言うまい。<br>・雨にはなるまい。                   |
| だ・です         | 断定              | 物事を確かなこととして言い切る。                       | ・あの山が富士山だ。<br>・弟は、小学生です。                 |

▼次の各組の文で、――線を引いた助動詞のうち、意味・用法が他と違うのはどれだろう。

① 弟が母に叱られた。

・ 先生が田中さんを指名された。

・ 先生から、「よくできた。」と言われた。

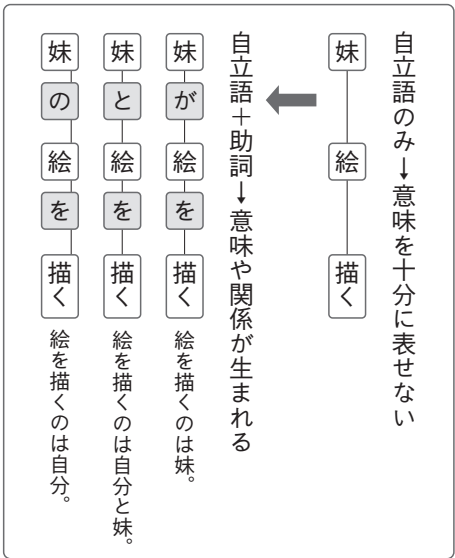
② 風景が描かれた絵を購入する。

・ 昨日は、雨が降った。

・ 眼鏡を掛けた人の隣に座る。

2 助詞

- 活用しない付属語を助詞という。
- 助詞は、自立語の後に付いて、さまざまな意味を付け加えたり、語句と語句の関係を示したりする。



▼次の文を文節に区切り、助詞に線を引こう。

① 私は、週に一回は麺類を食べる。

② 思い切り走ると、息があがる。

③ コーヒーか紅茶か、好きなほうを選ぶ。

④ ねえ、愛子さん、午後からどこへ行くの。

⑤ 駅前でバスに乗り換え、図書館に行く。

- 助詞には次のような種類がある。
- ① 格助詞

主に体言の後に付いて、体言とその下の語句との関係を示す。

が・を・に・で・と・から・へ・  
より・の・や

② 副助詞

いろいろな語句の後に付いて、意味を付け加える。

は・も・こそ・まで・しか・だけ・  
ほど・など・だって・でも・さえ・  
ばかり・くらい（ぐらい）・ずつ・  
か・とか・なり

など

- 主語を作る    連用修飾語を作る    主語を作る    連体修飾語を作る    並立の関係を作る
- ・ 鳥が飛ぶ。    本を読む。    先生に話す。    紙で作る。    「賛成。」と言う。
  - ・ 空から降る。    南へ向かう。    彼は僕より背が高い。
- 〔比較の基準〕    〔木の名前〕    AとB。    AやB。

- ・ 生水は飲まない。    〔取り立てる・限定する〕
- ・ 数学もできる。    〔他に同類がある〕
- ・ 来年こそがんばろう。    〔強調〕
- ・ 子供にまで笑われる。    〔極端な例〕
- ・ 僕しか知らない。    〔否定と呼応する限定〕
- ・ 野菜だけ食べた。    〔限定〕
- ・ 一時間ほどたった。    〔大体の程度〕
- ・ お茶などを飲む。    〔例示〕
- ・ あめを三個ずつ配る。    〔割り当て〕

◆「の」の表す意味・用法

- ・ 人類の宝。    ↓連体修飾語を作る
- ・ 僕の作った話。    ↓後の動作や状態の主語を表す
- ・ 「の」を「が」に置き換えられる。    ↓「の」を「……のもの」「……のこと」に置き換えられる。

話すこと・書くことに生かす  
副助詞が表す意味

① 君がリーダーだ。    格助詞

② 君こそリーダーだ。    副助詞

① ②はどちらも同じ内容だが、「こそ」には、「君」を推す話し手（書き手）の強い思いが感じられる。

副助詞は、ある事柄に対する話し手や書き手の捉え方・取り上げ方を表す。効果的に使って、伝えたいことを的確に表現しよう。

## 口語助動詞活用表

[illegible]

※表中に（ ）で示した語形は、ほとんど用いられないか、用いられ方が限られるもの。

### ③ 接続助詞

主に活用する語句の後に付き、いろいろな関係で前後をつなぐ。

から・ば・と・が・けれど・  
ながら・のに・ても（でも）・  
ので・て（で）・し・つつ・なり  
な

#### ④ 終助詞

文や文節の終わりに付いて、話し手・書き手の気持ちや態度を表す。

か・な・なあ・ぞ・かしら・  
ね（ねえ）・よ・の・わ・とも・  
さ・や

- おなががすいたから、何か食べよう。〔理由〕
- 雨が降れば、中止にする。〔条件〕
- 彼を訪ねたが、会えなかった。〔逆接〕
- 行っただけれど、間に合わなかった。〔逆接〕
- 歩きながら話す。〔同時〕
- テレビを見つつ、雑誌を読む。〔同時〕

風邪<sup>かぜ</sup>をひいて、学校を休む。〔原因・理由〕

- 彼も行くのだらうか。
- 誰にも言うな。
- きれいな空だなあ。
- 本当らしいぞ。
- 今、何時かしら。

川島さんなら、さつき帰ったよ。

▼次の――線部の助詞の、意味・用

法の違いを考えよう。

①・弟と私は、トランプでゲームをした。

● 弟が帰ってきたと、姉が知らせてくれた。

● 弟が帰ってくると、家の中がにぎやかになる。

②・改築中の図書館が、ようやく完成した。

- 遠回りをしたが、時間どおりに到着した。

③・隣の教室から、笑い声が聞こえた。

● 暗くなってきたから、明かりをつけた。

④・いつ戻ってくるの。  
・これは、僕の筆箱だ。

# 漢詩の風景

石川 忠久



漢詩に描かれた情景や心情、構成や表現の効果を考えて朗読しよう。【学習活動】



漢詩三編  
朗読音声

## 目標

- 古典のものの見方や考え方を知り、漢詩の特徴を生かして朗読する。
- 漢詩に描かれた情景や心情を読み取り、構成や表現の効果を考える。

春曉  
(シユンギョウ  
しゅんけう)

孟浩然  
(モウコウネン  
まうかうねん)

春眠曉を覚え  
ず

处处啼鳥を聞  
く

夜来風雨の  
声

花落つること  
知る多少

春眠不覚曉

处处聞啼鳥

夜来風雨声

花落知多少

1 孟浩然 六九―七〇 唐代の詩人。

春の眠りは、誰しも経験があるように、非常に気持ちのよいものです。寒くてつらい、長かった冬も過ぎ、いよいよ春になったぞという喜びを、「曉を覚えず」、つまり、夜が明けたのも気づかないぬくぬくとした眠りで表しています。外はいい天気らしく、あちらでもこちらでも鳥の声が聞こえます。そういえば、ゆうべは「風雨」の音がしていたなあ、と回想し

2 漢 曉 (ギョウ  
あかつき)

曉 (あつき)



春の朝

ます。花はいつたいどれほど散ったことや。作者は寝床の中にいて、明るくのどかな気分浸っているのです。作者の孟浩然是、故郷の鹿門山に自適の暮らしをしていました。この詩はその頃のものでしょう。季節の訪れも気づかず、あくせくと過ごす俗人の世界に対して、悠然と自然に溶け入った世界が歌われています。

このような、四句から成る漢詩を、絶句といいます。短い詩型ですから、あれもこれも歌い込むことはできません。そこで、詩人は、ここぞという一点を切り取って心の高まりや感動を表現します。その工夫の一つが、「起承転結」という構成法です。

第一句は、歌い起こしで、起句といいます。起句が平凡だと詩は生きません。「春曉」では、春の眠りの心地よさを、朝になったことに気づかないと表現するところに、詩人の発想があります。第二句は承句といい、起句を承けてさらに展開します。第三句は転句で、場面が転換します。「夜」「風雨」という語が暗い雰囲気をもし出し、前半の明るい情景から一変します。これが転換の妙味、読者に、おやっと思わせます。最後は、全体を締めくくる結句です。読者の眼前には、庭一面に散り敷いた花びらが、ぱっと広がります。花びらは雨にぬれ、朝日を浴びていよいよ鮮やかです。転句が暗いだけによい印象が強くなるのです。そして、それが余韻となって、春の朝の気分が漂います。見事な収束です。

この構成法は、誰かが考え出したものではなく、永年の知恵で自然に定まったものなのです。

3 鹿門山 今の湖北省にある。

7 絶句 一句が五文字のものを五言絶句、七文字のものを七言絶句という。(164ページ「律詩について」参照)

5 漢 俗 (ソク)

俗人

5 漢 悠 (ユウ)

悠然

12 漢 凡 (ハン)

平凡

16 漢 締 (テイ)

締めくくる

17 漢 敷 (シク)

散り敷く

絶句

杜甫

江は碧にして鳥は逾よ白く  
山は青くして花は然えんと欲す  
今春看す又過ぐ  
何れの日か是れ帰年ならん

江碧鳥逾白  
山青花欲然  
今春看又過  
何日是帰年

この詩は、杜甫が成都にいたときの作です。うち続く

戦乱を避けて、友人を頼りにこの地へ来たのです。まず、  
この地の美しい風景が前半の二句に描かれます。川は深  
みどりに澄み渡り、その水の色をバックに水鳥はいっそ  
う白く見える。「碧」は深く澄んだみどりです。向こう  
の山は青々と茂っている。それをバックに花が燃えるよ  
うに咲いている。この花は、つつじか何かでしょうか。  
「然」は「燃」と同じ。「然えんと欲す」とは、今にも燃  
えだしその意で、花が真っ赤に咲いているさまです。  
二句十字の中に、「碧・白・青・然」赤」と色を表す字  
が四つも含まれ、なんとも鮮やかな南国の春景色が浮か



杜甫草堂（杜甫が成都にいたときの住居跡）

1 杜甫 唐代の代表的な詩人の一人。

6 成都 今の四川省の省都、成都市。

8 前半の二句 この二句は対句になっており、形や意味が似た構成になっている。

4 又 また

11 漢 茂 しげる

又 また

茂 しげる

び上がります。

後半では、この風景を前にした作者の思いが歌われます。今年の春も、あれよあれよという間に過ぎてゆく。いつ故郷へ帰る年が来るのだろうか。「看す」は、見ている間に、という意味です。故郷へ帰れないままにまた春が過ぎてゆく、それをどうすることもできないのです。異郷の明るい春景色の中で、悲しみに沈む作者の姿が強く印象づけられます。北の故郷を離れて六年目、杜甫は五十三歳でした。

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

李白

故人西のかた黄鶴楼を辞し  
煙花三月揚州に下る  
孤帆の遠影碧空に尽き  
唯だ見る長江の天際に流るるを

故人西辞黄鶴楼  
煙花三月下揚州  
孤帆遠影碧空尽  
唯見長江天際流

黄鶴楼は武昌の町にあります。長江を見下ろすこの楼の上で、孟浩然を見送った詩です。二人とも浪人の身の上でした。就職の手づるを求めている旅でしょうか。孟浩然是ここから揚

3 故郷 杜甫が帰りたい故郷とは、都の長安（今の陝西省西安市）である。  
7 黄鶴楼 昔、仙人の描いた黄色い鶴が壁から抜け出し、仙人を乗せて飛び去ったという伝説から、この仙人を記念して建てられたといわれる。現存するのは一九八〇年代に再建されたもの。

7 李白 唐代の代表的な詩人の一人。杜甫と並び称される。

9 揚州 長江（揚子江）の下流、江蘇省にある。

12 武昌 今の湖北省武漢市の一部。長江中流部にある。

5 漢 沈 しずむ

12 漢 楼 ロウ

13 漢 浪 ロウ



## 学びへの扉

見通しをもつ

漢詩に描かれた情景や心情、構成や表現の効果を考えて朗読しよう。〔学習活動〕

目標

- 古典のものの見方や考え方を知り、漢詩の特徴を生かして朗読する。(知る)
- 漢詩に描かれた情景や心情を読み取り、構成や表現の効果を考える。(読む)

捉える

### 1 漢詩に描かれた情景や心情を読み取ろう。

3編の漢詩に描かれた季節、情景、作者の心情を、解説の文章を手がかりにして読み取ろう。

読み深める

### 2 構成や表現の効果を味わおう。

- ①それぞれの漢詩について、筆者が注目した構成や表現とその効果を、簡潔にまとめよう。
- ②漢詩の中から気に入った表現を選び、引用して、表現の効果やよいと思った理由を伝え合おう。

筆者の着眼点や、評価のしかたが、作品のよさを伝えるときに参考になりそう。



考えをもつ

### 3 漢詩の特徴を生かして朗読しよう。

- ①グループで朗読の会を開き、漢詩に描かれた情景や心情、構成や表現の効果などが伝わるように工夫して朗読しよう。
- ②何を伝えるために、どんな工夫をしたかを交流し、互いの朗読の優れたところを伝え合おう。

振り返る

- ▶ 知る ☐ 漢詩のどのような特徴が伝わるように朗読したか。
- ▶ 読む ☐ 漢詩に使われている表現の中で特に効果的だと感じたものは何か。
- ▶ つなぐ ☐ 朗読のしかたを工夫したり、友達の朗読を聞いたりする中で、新たに発見したことや、理解が深まったことを挙げてみよう。



筆者 石川忠久 一九三二（昭和七）——二〇二二（令和四） 東京都出身。中国文学者。  
著書 「漢詩の世界」「漢詩の風景」「漢詩への招待」  
「日本人の漢詩——風雅の過去へ」など。  
出典 本書のための書きおろし。

州へ行くのです。「故人」とは古くからの親友のこと。友は、西にあるこの黄鶴楼に別れを告げて、春、かすみ立つ三月に、揚州へと舟で下ってゆく。「煙花」とは春がすみです。旧暦の三月は晩春です。揚州は広陵ともいい、長江下流第一の繁華な都。前半は、なにやら華やかな情景が描かれます。

しかし、後半は華やかさとは逆に、孟浩然の孤独な姿が捉えられます。広い長江の流れにぼつんと一つ浮かんだ帆掛け舟。その白帆の小さな姿がゆるゆると遠ざかる。いつまでもいつまでも黄鶴楼の上で見送る李白。やがて白帆は青空のかなたにふっと消える。後には、ただ天際まで続く長江の水が流れるばかり。こう歌い放つことによって、別離の悲しみは尽きずに漂うのです。



黄鶴楼



「漢詩のレッスン」 川合康三 かわいこうぞう



「漢詩への招待」 石川忠久

『広がる読書』

4 漢 暦 こよみ

旧 暦 レキ

漢字の練習



律詩について

春望

杜甫

国破れて山河在り  
城春にして草木深し  
時に感じては花にも涙を濺ぎ  
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす  
烽火三月に連なり  
家書万金に抵る  
白頭搔けば更に短く  
渾べて簪に勝へざらんと欲す

国破<sup>レ</sup>山河在<sup>リ</sup>  
城春<sup>ニシテ</sup>草木深<sup>シ</sup>  
感<sup>ジテハニ</sup>時<sup>ニ</sup>花<sup>ニモ</sup>濺<sup>レ</sup>涙<sup>ヲ</sup>  
恨<sup>ンデハレヲ</sup>別<sup>ニモ</sup>鳥<sup>ニモ</sup>驚<sup>カス</sup>心<sup>ヲ</sup>  
烽火<sup>ナリ</sup>連<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>月<sup>一</sup>  
家書<sup>ニ</sup>抵<sup>ル</sup>万<sup>ニ</sup>金<sup>一</sup>  
白頭<sup>ケバ</sup>搔<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>短<sup>ク</sup>  
渾<sup>ベテ</sup>欲<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>簪<sup>ニ</sup>

戦乱によって国都は破壊されたが、山と河はそのままにある。  
城壁で囲まれた町の中にも春が訪れ、草や木が生い茂っている。  
時勢に悲しみを感じては花にも涙を流し、  
別れを恨めしく思っでは鳥の声にも心を驚かす。  
戦乱は三か月間も続き、  
家族からの手紙は万金にも値する。  
白髪頭をかくとますます抜けて少なくなり、  
全くかんざしで冠を留められないほどだ。

「春望」のように八句でできている詩を律詩という。律詩は、一句の字数が五字であるか七字であるかによって五言律詩、七言律詩に分けられる。また、第三句・第四句と第五句・第六句が必ず対句になる。対句とは、同じ構成の二つの句を対にして並べる表現技法のことである。「春望」は五言律詩であり、第一句・第二句、第三句・第四句、第五句・第六句が対句になっている。

注 春望 春の眺め。  
国 国都。長安のこと。  
城 城壁で囲まれた都市。これも長安を指す。  
別れ 戦乱によって家族と別れること。  
烽火 戦いののろし。ここでは、戦乱のこと。  
三月 春三月とする説もある。  
簪 冠を髪に留めるためのピンのこと。